

## 伊能忠敬の印象的な言動

戸村 茂昭

### 一・南鐮一片遺しけり

寛政十二年閏四月二十三日、白河城下の止宿先となった因幡屋の主は、佐原出身であったことからねんごろになり、酒肴を以つて饗応してくれた。そのお礼に、主の女房に一枚の南鐮銀をチップとしてさし上げた（南鐮一片遺しけり）、と記録している。南鐮銀一枚は小判の八分の一に相当する値打ちがあったというから、現在の価値で三〜四万円ということになる。忠敬先生、よっぽどうれしかったのかも？

### 二・翌朝雲間小測

享和二年六月十一日、忠敬先生は第三次（出羽・越後）測量に出発したその当日の止宿先「草加宿」では「此の夜、曇る。翌朝雲間小測」と記録している。この「翌朝」が何時ごろかと言え、晩秋の星座であるペガス座の星々（離宮四、離宮二〜室宿二、室宿一）であるから、推歩先生の知見（観測した恒星が南中する時刻）によれば、未明の午前三時頃となる。まさに、伊能測量とは「昼は地を量り、夜は天を測る」という寝る間も惜しんだ測量地の旅であったのである。

なお、深夜から未明になって天測したケースは次の通り枚挙に暇がないのである。

- ・一次測量 寛政十二年  
十月六日 吉岡「七日七日晨少晴測量」  
十月九日 舟廻「翌十日晨測量」
- ・二次測量  
・三次測量 享和二年  
六月十四日 間々田「此夜暁に測量」  
七月二十四日 能代「子午線午後に来上がる」※その晩、80個の恒星を暮五ツから翌日未明まで測った（北極高度測量記）。  
九月二十三日 太郎代浜「此夜曇天。暁七ツ頃。測量」  
十月十七日 本庄宿「此夜曇天。雲間に漸六七星測る。九ツ頃より雨、至暁。」
- ・四次測量  
四月十六日 「此夜曇天。十七日暁晴て測量」
- ・五次測量  
五月二日 鳥羽城下「此日未明 遠山を測る」  
五月六日 鳥羽湊「此夜木星、四小星凌犯を測る。暁に至る」
- 九月二十日 坂本村「未明に比叡山四明ヶ岳へ登りて山々を測る」  
二月二十二日 宮浦「此夜曇、雲間に測量。」  
二月二十三日 「前夜九ツ頃より乗船し、潮引を待合、未明より・・・」
- 十月十日 敦賀町「暁七ツ半後晴間測る」
- ・六次測量  
・七次測量  
七月十日 山川津「木星測、暁に付一同疲れ」  
七月二十六日 片浦村「此暁木星を測」  
八月二日 上甕島里村「此夜木星と二小星凌犯あり。暁迄測」
- ・八次測量

三、夢に堀田侯に謁す 三次測量、  
享和二年七月二十六日、能代  
「予二十五日より病氣、此夜夢に堀田侯に謁す」

※堀田侯とは堀田撰津守正敦で寛政二年から天保三年までの四二年間の長期にわたって若年寄を務め、伊能測量を幕府の中核で支えた。出自が仙台藩伊達家で忠敬の妻お信の岳父である仙台藩藩医の桑原隆朝とも親しい間柄ということから、忠敬の後ろ盾でもあったのであろう。

### 四、芭蕉塚発見

- ・七次測量  
文化六年十一月十一日 大久保町  
蛸壺やはかなき夢を夏の月
- ・八次測量  
文化九年九月二十六日  
梅が香にのっと日の出る山路かな  
文化九年九月二十七日  
世の人の見つけぬ花や軒の粟  
文化九年九月二十九日  
川上とこの川下や月の友  
文化九年十月五日  
月影や四門四宗もただひとり  
文化十年九月十六日  
目にかかる雲やしばしの渡鳥  
文化十年十二月八日  
さまさまのこと思ひ出すさみしきかな  
文化十年十二月廿日  
梅が香にのっと日の出る山路かな  
文化十一年三月十三日 真言宗相染印

境内に芭蕉塚というあり

文化十一年四月二十六日

霧時雨富士を見る日の面白記

文化十一年四月二十九日

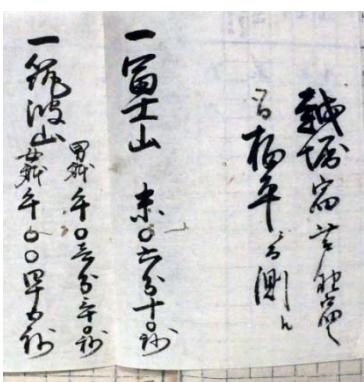
おもかげや姥ひとりなく月の友

### 五、富士を測る

・本州最北東端 三次測量

享和二年六月二十日 山嶋方位記二卷

越堀宿く芦野宿間栢平(富士見峠)



・本州最東端 二次測量 銚子湊

享和元年七月二十六日

此早朝、日出に犬若岬において慶助、

富士山を測。着後十九

日より富士山の方位を

測らんと日々手分し、

高きに升起遠へ出しけ

れど、日々蒙気おおく

して見えざりき、此朝

富士山を測得たり。そ

のよろこび知るべし。



予が病氣も最早全快に及べり。

(申一九分二五秒)

※何故、病氣が全快するほど、喜んだのであろうか？

記念碑の文言に依れば「忠敬はこの地で伊能測量の方法による測量の精度を確

認できたから・・・」としているが、筆者の見解はこれとは若干ながら異なる。

実は、この地に至るまで導線法と天体観測による測量はできたのであるが、今

一つの「交会法」による測量の目標とする高山や島影がこの房総半島の外房には

一切ないことから、本州最東端にあたるであろうこの地を地図の上で矛盾なく描

けるか心配だったのであろうと考えられるのである。このような具体的な心配事

がこの地での富士山測量で払拭できることになったので、持病が全快するほどの

喜びとなったのであろうと考えるのが妥当であると思うのである。

・本州最西南端 五次測量 国府海岸

文化二年五月十九日

朝晴天、六ツ頃国府村海岸に出

て富士山を測る

(丑二五分五〇秒より丑二

六分)



六、後世永々英名を御残し候事この時に候て

四次測量、享和三年九月二十二日、

いわゆる糸魚川事件にあたり、師匠高橋

至時からの親身なる書簡の一節である。

「元来御存知の事にて申迄は無之候えども、

即今、

天下の曆学者各眼を拭い、

足下の地図成就の期を日を算え待候事にて、

後世永々英名を御残し候事此時に候て、

又是を以、

世上曆家の机上腐臭の故態を破し、

精密の一家堅く相建候も 今の時にて、

実に足下の一身、天下曆学の盛衰に係ると可申候。

加程の大事業の將に成んとするの間、

一小事にて万々一中絶に成候はば、

何程の残念と思召候哉。」

七、地図を精敷認候術は、

第一は北極出地度、其次は方位

一次測量幕府折衝編

松平信濃守様より我等蝦夷御用之御

沙汰猶御尋之儀有之候由に付、為御使

渡辺清蔵殿態々御遺し被下御尋に付、

左に書付差上候。(中略)。

地図を精敷認候術は、第一は北極出

地度、其次は方位に御座候。

八、おわりに

このように、伊能測量には興味の尽きないド

ラマが満載であるのだから、大河ドラマにすれ

ば日本が元気になるであろうに。